

# 『パンセ』とメタテキスト（その1）

## —未完成エクリチュールの徴候についての試論—

末 松 壽

... il mettoit sa pensée en peu de mots, & fort souvent mesme seulement à demy mot ; car il ne l'escrivoit que pour luy (Etienne Périer).

... la pensée expulse des phrases plus ou moins mures (Paul Valéry).

Tu vois, mes œuvres sont un échec. Je n'ai pas dit tout ce que je voulais dire ni de la manière dont je voulais le dire (Jean-Paul Sartre).

### 序

『パンセ』におけるテキスト/《メタテキスト》の区別について考えよう<sup>1)</sup>。これは余りにも初歩的で、しかも作品のもつ未完成のテキストという特殊性ゆえに可能になる孤立的な問題にすぎないと見えるかもしれない。しかしいくつかの理由によって、二種類のテキストにおける構造的・機能的差異に注目することが必要であると思われる。第一に、それは『パンセ』の作品としてのあり方にかかわる。それは、取るに足りない些細な事故、周辺的な現象もしくは自明の理と看做されたのか、大して読者の注意を惹くことはなく、従って組織的に考察されたこともないように見える。しかし、如何なる版で読もうとも人はまず《メタテキスト》に出会わないことはできず、また始終これを何らかの形で処理しつつ読んでいるに違いない。というのは、『パンセ』において《メタテキスト》はほとんど遍在しているからである。その意味では『パンセ』は特権的な作品である。そして明証的なこととしてこれを見ようとはしない読者の好意的な、或いは手慣れた処置、これを一つの問に変えることから文学（の学）は始まるのかもしれない。『パンセ』テキストの組成（texture）にかかわる以上、それを無視するならば

人は、作品を読み誤まる虞なしとはしない。第二に、そこから発して、《メタテキスト》概念の確立は、一般にテキスト研究へのもう一つの手懸りにもなり得よう。ここでの考察の端緒になるのは、確かにある特別な状況のもとに起草され編成されそして残された文書（しかし、そうでないテキストがかつて存在したであろうか）の示す個別的な徴候であるが、筆者の意図は、決してその個別性に閉じこもることにはなく、それを通じてテキスト一般について考えることにある。それ故ここでは、作品の細部への集中と視野の拡大とを絶えず反復することになるであろう。まず問わねばならない。(メタ)テキストとは何か。(メタ)テキストは如何なる種類に区別されるのか。

## 第一章 メタテキストとは何か

### §1. テキスト / メタテキスト

一例をとろう：

様々の相反性。人間の下劣さと偉大さを示した後で。今や人間は自分の値打を評価すべきである。自分を愛するがよい。というのは彼のうちには善をもつことのできる本性があるのだから。しかしだからといって、彼はそこにある下劣さを愛してはならない。自分を軽蔑するがよい。なぜならばこの能力は空虚なのだから。しかしだからといって、彼はこの本性的能力を軽蔑してはならない。自分を憎悪せよ。自分を愛せよ (...) (VIII 151-119)<sup>2)</sup>。

まず冒頭に注目しよう。そこには《Contrariétés》という無冠詞の複数名詞がある。これをラフェマはル・ゲルンと共に断片の標題としているが<sup>3)</sup>、セリエはトゥールヌール・アンジウと共に断片束の標題としている<sup>4)</sup>。断片の草稿が紛失している以上、この語が元々いかなる位置にどのように書かれていたのかは知る由もない。けれども冠詞の不在によって、少くともそれは断片の本文とは明らかに身分の異なる語であることはわかる。

続いて単独で現れる過去分詞節《Après avoir montré la bassesse et la grandeur de l'homme》は奇妙なテキストである。ここで《montrer》(示す)という他動詞は続く文章の主語《人間》を動作主としてはいない。そこに不在の動作主は、自分を固有名で名指すことも人称代名詞で指示することもなく書き手その人である。他動詞は彼の書く行為を記述している。主節を欠く故に充足しないこの過去分詞節は、書き手が企てている作品の進展段階を指示対象としている。彼は

人間の下劣と偉大とを書いたあと、続く文章が来るべきこと、即ち制作しつつある作品の中でまさに書こうとしているテキストの位置づけを行っているのである。ちなみに、下劣と偉大とは1658年の分類における幾つかの断片束、《章》に送り返す<sup>5)</sup>。第Ⅶ章は《偉大》の標題のもとに14の断片を収録している。《下劣》については、この語をそのまま名前とする章は見当たらないけれども、少なくとも第Ⅳ《Misère》(悲惨)の章がこれに対応すると考えることができる。その章の冒頭には、《bassesse》なる語から始まる断片が見出されるからである：

獸に屈従し、それを拜むに至るまでの人間の下劣さ (86-53)

がそれである。

ところで、作品の構成法や進度を主題とするテキストは、書き手の端的な意味での言説ではなく、言説に関する言説であり、護教のテキストに関するテキストである。それは続く希求法の文に始まるパラグラフ全体とは性質が異なる。ブランシュヴィックが標題と共にこれを斜字体にし、ポール・ロワイヤルのグループが標題と共にこれを削除した所以である。(このように不完全で、新たな思想を何もたらさないテキストを簡単に考慮の外におくのが初版の刊行に携った人々の批評意識であった)。テキストについてのテキストは、《langage》に対する《métalangage》の関係との類比によって《メタテキスト》(métatexte)とよぶことができる。『パンセ』にはこうして、幾つかの言語域に属し、その機能や身分(statut)を異にするテキストが共存しているのではないかと推測することができる。差し当ってテキスト/メタテキストを区別しよう。テキストが個々の断片の、また章の本体をなす端的な意味での言説であるのに対して、メタテキストとは、そのテキストにかかわるテキストであって、それは恐らく書き手が書きつつある自分自身に宛てた言説で、作品制作の進展につれて、或いは消滅し或いは少なくとも何か別の言説に変わるべきであったテキストである。

『パンセ』における二種類の言表の相違は、次に引用する例についても見ることができる：

A. P. R. 始め。

不可解さを説明した後で。

人間の偉大さと悲惨さは極めて明らかなので、人間のうちに偉大の何か大きな原理と悲惨の大きな原理とがあることを、真の宗教は我々に教えなければならない。

更にそれは、これらの驚くべき相反性を我々に説明しなければならない...(XII《A. P. R.》182-149)。

最初の《A. P. R. Commencement》は断章の標題であるが、奇妙なことに、これら二つはいずれも独立の二章のタイトルでもある。《始め》と名付けられた章は

《A. P. R.》の直後、即ち XIII 番目を占めている。この奇妙な事実は、作品の生成過程について二、三の推量を可能にする。1°書き手がこのテキストを書く時点においては、これら二つの章分けは明確でなかったということ（或いは、たとえ明確であったとしても、このテキストがいずれの章に配分さるべきかは定まっていなかったということ）、2°このテキストは章としての《始め》の構想よりは後に起草されたということ、3°《A. P. R.》なる章の構想は《始め》の章から恐らく派生したものであろうこと、である。

ところで、この二重の標題に続く行：《Après avoir expliqué l'incompréhensibilité》<sup>6)</sup>なる過去分詞節は、先に見たのと同じく、作品中での断章の位置づけを示すメタテキストである。人間の《不可解さ》とは主として VIII 章《様々の相反性》の主題に対応する。この章に対して断片は《後に》来るというのである。実際、そこに分類された最大の断章では、人間の不可解さとその根としての原罪が話題になっていて、

…しかし、あらゆる神秘の中で最も不可解なこの神秘なくしては、我々は我々自身にとって不可解である (164 [p. 90] -131)

なる文章が読める。更に、引用文最後の《これらの驚くべき相反性》(contrariétés) は VIII 章の標題の語そのままである。

ところで A. P. R. とは A Port-Royal の略であろうと伝統的に考えられてきた。明らかにこの修道院の《小さな学校》のことを P. R. と表記した断片が他にあって、第一写本ではそれをニコルが Port-Royal と書き直しているという<sup>7)</sup>。《A. P. R.》断章(群)は、パスカルがポール・ロワイヤルにおいてその護教論についての講演を行ったことと関係があり、しかも諸断片の分類はこれを機会に開始されたであろうというのが学者達の推測である。たとえばル・ゲルンは書いている：

パスカルがポール・ロワイヤル・デ・シャンで行ったであろうその弁証論の企てに関する講演について、ジャン・メナールは1658年(5～)6月の時期を提案している。ルイ・ラフュマは1658年の10～11月を。いずれにせよ、この講演をめざして開始された断片束への分類は1658年秋まで続けられたであろう<sup>8)</sup>。

そのことはしかし、《A. P. R.》のテキストの起草が《始め》なる章の構想の後になされたであろうとの推定を妨げるものではない。

言うまでもなく、『パンセ』は著者自らの手によって日の目をみた作品ではない。作品というよりそれは作品製造の《アトリエ》であると人は言う。再びル・ゲルンを参照すれば、

もしパスカルが弁証論を終えていたならば、我々は彼がどんな風に仕事をしていたかを知ることではできないであろう。『パンセ』は類珍な一作家の仕事ぶりについて我々に尠大な量

の情報を与えてくれる<sup>9)</sup>。

この種の情報は、他の大古典作家については知る由もない。《仕事場》には、製造の過程においては用いられるが、製品においてはもはや伺い知ることのできない材料やその使用法を示す書付も発見される。『パンセ』の特殊事情はこうして、特別な言語域に属する言表を含む数種類のテキストの析出を可能にするのである。

しかし、敢えて造語にまで訴えてこのような考察を行う必要はあるのか。この種のテキストは作品のうちに頻繁にみられるのか。それは作品の理解にとって重要性をもつのか。そもそもそれは、純然たるテキストからどのようにして判別されるのか。これらの疑問が我々を導くことになる。

## §2. メタテキストの弁別特徴

もう一つ例をとろう：

神を探すべく促すための書翰。

次に哲学者達—ピロニヤンやドグマティスト—において神を探さしめる。彼等はそれを探求する者を苦しめることであろう（II, 38-4）。

短い二つの段落から成るこのテキストは、全体的に書き手の書く行為そのものを主題としている。《促す》《探さしめる》は、書き手が自分自身に宛てた意図の表明である。換言すれば、この言説の宛人（destinataire）は送り人（destinateur）その人であって、その他に読者なるものは想定されてはいない。

ところで最初の文（Lettre pour porter à rechercher Dieu）は、冠詞を欠いていることからわかるように標題である。もっともそれは続く文章の標題ではない。というのも続く段落は、《次に》（Et puis le faire chercher...）で始まる事実によって、同一レベルにある主題の間の移動を示しているからである。それは従って、書かるべきしかし未だ不在のテキストの標題である。つまりこれは備忘録としてのメタテキストでありかつ標題でもあるということになる。

では第二段落の後半の節はどうか。一見それはテキストであろうかと思われる。主語（関係代名詞の先行詞）は《哲学者達》であり、内容も神の探求における哲学史研究の不十分性であって、それは書き手の書記行為をものはや主題としてはいない。しかし反面、そのような内容がここで、書き手の自己に宛てた覚書として、（未来形の使用によって<sup>10)</sup>）予告されている。書く行為の未来において展開されるべきものが主節のメタテキストに文字通り従属している。メタテキストが

テキストになりつつあると言うべきか。或いはメタテキストがテキストを導入しているというべきか。(メタ) テキストの微妙な変質のプロセスを示すこのような例は他にも時に発見することができる<sup>11)</sup>。

以上挙げた三つの例から見て、テキスト/メタテキスト識別の基準はまず何よりも次の事態であることが予想される。即ち、文章が書かれつつある作品の構想・編成・書き手の意図を主題とするか(メタテキスト)、それとも宗教やその他の事柄を主題とするか(テキスト)である。そしてまた、宛人が送り人自身であるか(メタテキスト)、それとも読者であるか(テキスト)をもう一つの基準とすることができると思われる。テキストにおいては書記行為は本質的に二重のいみで他動的である。それは他について語り他に向けて語る。他方メタテキストは再帰性ないしは自己完結性、あるいは自閉性を特徴とする。

『パンセ』テキストの未完成という事情から、そして何よりそこに材料の使用にかかわる指示や製造のプランを示すノートが存在する事実から、筆者はメタテキストという考え方を抽出してきた。上にその内包を暫定的に定義したこの概念を、更に明確にかつ精密に練り上げると共に、もう少し一般的な観点から考察する必要がある。これまでのところ筆者は、これを他の作品には見られない(かと思われる)特殊な言説にのみあててきた。しかしメタテキストなるもの、少くともそれに類似したものは『パンセ』以外にもあるのではないか。そしてその場合にも、上に立てた弁別特徴は有効な基準であるだろうか。メタテキストの外延を問わねばならない。

### §3. メタテキストの外延

まず既に問題になった備忘録から考察する。

#### 1. 備忘録

ここで指摘しなければならないのは、全ての備忘録がメタテキストではないという点である。(逆に全てのメタテキストが備忘録か否かは§3の2以下で問う)。

日常生活において人は、何か後になすべきことを、しかし当面はその十分な余裕がないため、或いは今はまだその時でないために書き留めておこうとする。それは文字であるとは限らない。後にそれを思い出すに十分の何らかのしるしであればよい。このような心覚えのための文字または標識による前以っての《痕跡》、或いは一時的な放念のための手だてが備忘録と呼ばれる。従ってそれは、後に来

るべき何らかの行為（後にまた見るという行為であってもよい）を常に要請する。行為が少くとも試みられることによって備忘録の機能は完了する。ところで、このように予定された行為が特殊的に書くことである場合がある。あれこれのことに、あれこれの仕方を書くために、それを想起するに充分のことを差し当って書き付けるのである。

これは『パンセ』テキストのもつ看過することのできない一面である。例えば S 版でいう I《Liasse-Table》（目次束）の冒頭に位置する二断片：

関係の深い事柄を軽蔑するほどまでに無感覚で、我々に最も関係の深い点にすら無感覚になること（2-383）、

彼等が預言者をもたなくなっからはマカベ。イエス・クリスト以後はマソラ（3-384）は、何よりもその晦渋さで読む者を苦しめ欲求不満の状態におく。だが、性急にわかろうなどという邪心（或いは童心？）を拒み、わからない事実をそれとして認めてその原因を問うことが、必ずしも主題の認定や意味の把握に還元することのできない文学的わかりの始めであると心得なければならない。というのもこれらは覚書であって、書き手はそれを自分自身のためにしか書いてはいないのである。これは未来のテキストの予想（*prévisions*）であり、かつそのための貯え（*provisions*）である。簡潔さのために明示的でないこのようなテキストが数多いことから、それに何よりブレーズの甥がその源となった伝承によって、衰弱の天才は《行きあたりばつたりに》書いたという神話が、実に二世紀以上にわたって流布することになったのは周知のことである。既にポール・ロワイヤル版（1670）がその《緒言》において犯した誤謬は<sup>12)</sup>、60年後『哲学書簡』によっても受け継がれる。「彼が、後に検討するために行きあたりばつたりに紙に書きつけておいたこれらの思想」とヴォルテールは書いている<sup>13)</sup>。誤謬とは、それが全称命題であるという点に存する。読者は、ペリエの報告の内に混淆している玉石を選別することができず、（草稿も写本も見ることなくどうしてそれができただろう）、何より断片束、従って分類の存在を明言する決定的に重大な箇所を見落したのである。宗教に関するパスカルの文書（*les écrits*）についてエティエンヌ・ペリエはこう書いていた：

全てまとめて糸が通され幾つもの束をなしていた。がいかなる秩序も脈絡もなく…<sup>14)</sup>（強調筆者）。

けれども、分類、従って構成やまた推稿の事実を強調する余り『パンセ』テキストに多くの未完成の徴候があることを否認するとしたら、それは逆の誤りである。実際、上に引用した二断片が余りにも短く文法的にも欠陥があって、そのの

みでは意味の理解も主題の認定すら容易でないことは事実なのである。というのも、序文作者が書いているように、「何らかの新しい思想、何らかの見方や着想、更には何らかの言回しや表現」が現れる時に、パスカルが「それを忘れないためにその何がしかを書いておこう」としたこと、それも「しばしば半言で」。こうして「自分の抱いている見方とか観念を思い出すに必要なものだけを書き付けた」ということは、メナールと共に承認することができる<sup>15)</sup>。書き手には「自分のためにのみ」書くことがあったのである。初版刊行に携った一人、ニコルもそのことを知っていた。『パンセ』について若干の思想的な反論をしつつ、

全く正確とは思われない幾つかの思想すらあって、それらはもっと注意深く検討するためにのみ書かれる軽い思いつきに似ている<sup>16)</sup>

と彼は書いている。『パスカル讃』(1740年出版)の中の故人の作文方法に関する証言：「彼は他人が最初から完璧 (absolutam) と判断するテキスト (scriptionem) を6回 (sexies), 10回 (decies) と新たに作り直す (refingere) ことも辞さなかった」は、上の指摘とテキスト間空間を構成する<sup>17)</sup>。ただ『パンセ』テキストは常にこれ程の手入れは受けていない。そこに多数のテキストのもつ省略という一つの特徴が由来する。それはメモや下書きに特有の省略体 (ellipse) に他ならない。書き手は《後で検討するために》、後の書き直しを予定してそれらをしたためたのである。例は枚挙に暇がないが、無雑作に二つ挙げておく：

#### 宗教の証明

モラル / 教義 / 奇跡 / 預言 / 表徴 (21-402).

彼には四人の従僕がいる (53-19).

もっとも、《下書き》という概念は、断片21のように文法性への侵犯がその徴候である場合を除けば、ここで相対的な意味しかもたない。というのは、断片53が下書テキストであることは疑えないにしても<sup>18)</sup>、同じ範例をもつ、より長いとはいえそれでも断片であることには変らないテキストではどうか。即ち、

#### 結果の理由

あきれたことだ。錦まがいの身なりをして、7・8人の従僕をつれた人を私に敬わせないというのだ (…)(123-89).

妥当な答えが可能であるとすれば、それはあらゆる断片が断片である限りにおいて多かれ少かれ下書きの部類に入るといことであろう。今はテキストの量については、下書きと決定稿を分つ境界はないと認めるに留めておく。そしてここでは、上記二例のように異論の余地のないものをそれとしてとり上げる。

ところでこれらのテキストは、作品で扱うべきあれこれの主題に関する文章であって、筆者がメタテキストと呼ぶものの範疇からは逃れる。(もっとも、概念



の拡大を恐れなければ、不在のしかし既に予見されたテキストに関するテキストであるが故に、これもまた擬似あるいは準メタテキストと命名することも可能である)。備忘録でありながら下書きではなく、後に手を入れることを予想させながらその手入れの仕方にかゝわるもの(再帰的エクリチュール)を、筆者は端的にメタテキストと呼ぶことにする。断片151, 182の孤立した過去分詞節 (§1 参照), 38の名詞節と不定詞節 (§2) は紛れもなくそれであった。要するに、後に書くべきことの何がしかを既に書いているか、それとも書くべきだと書いているかを区別し、後者を備忘録の中でのメタテキストと規定するのである。

若干の例を追加すれば、

行きすぎた表徴主義者に反論すること (286-254).

《表徴》の章にある、表徴の原因にかゝわるものを《基礎》の章におかねばならない (...)  
(256-223).

人を欺く力に関する章をここから始めなければならない (78 [p.55]-45)

等がある。最後の例は、草稿の欄外に線で囲んで記入された文である<sup>19)</sup>。草稿においては、余白に書かれていることがメタテキストの物理的な、但し理論的には補助的な弁別特徴になることもある。『パンセ』の出版者も翻訳者も、こういう書き込みは一目で区別できるような体裁のもとに印刷することが望ましい<sup>20)</sup>。

最後に、ここでの識別は単純化されたものであることを述べておく。というのは、束と束にまたがって、下書き(備忘録テキスト)でありながら二次的に他のテキストの配置を指示する標識(備忘録メタテキスト)として機能すると見られる断片もある。例えば、IV《悲惨》の短い断片103-69《悲惨/ヨブとソロモン》はI (L. Série I) の断片22-403:

悲惨

ソロモンとヨブとは人間の悲惨をもっともよく知り、それについて最もよく語った。一方は最も幸福で、他方は最も不幸で、一方は経験によって快樂の空しさを知り、他方は不幸の現実性を知った

の位置を示す、とセリエは指摘する<sup>21)</sup>。下書テキストのメタテキストへの変貌、これは興味を唆る現象である。けれども我々の意図は差し当って、基本的な差異においてメタテキストを定義することにあるので、このレヴェルの問題は今は除外しよう。(これは、章と章に跨るテキストとメタテキストとの関係の観点から後に取り上げる)。

以上が備忘録/メタテキストの重なりとズレの関係である。これら二つは送り手と宛人の同一性の基準を共通に満たすけれども、主題の再帰性の基準によって判別される。それに適う備忘録はメタテキストであり、そうでないものは下書き

である。最後に、いずれの場合においても、例文はしばしば文法上の不完全さを示す省略という特性をもつことを確認しておこう。孤立した不定詞の構文 (S. 2, 286) や、特に孤立した名詞連辞体 (3. 21, 103) は破格である。

## 2. 註釈

メタテキストにはもう一つの種類がある。書き手が補足のために加えるいわゆる註釈である。文献を示すにせよ、作品の他の箇所に戻すにせよ、論旨に補強または保留や制限をもたらすにせよ、主題にちなむディテールを指摘するにせよ、(或いはそれらの作業を方法的に用いて、検閲に対する屈折した戦略とするにせよ)、その具体的な用途は様々であるとしても、それが共通に本文を閑説物として生れるテキストであることに異論はないであろう。即ちメタテキストである。

虚構作品の中には、異様な事例として、存在しない著書や実在しない著者に関する註釈として作られたテキストがあることを指摘しておこう。これはメタテキストの体裁をとったテキストである。ボルヘスの『伝奇集』(1941) に収められた一・二の作品はその例である<sup>22)</sup>。また、概念を拡大しすぎないために、過去および同時代の外在的テキストに関する言説、クリステヴァのいわゆる《テキスト間関係性》の問題はここでは取り上げない。考察を同一作品内の註釈テキストに限定する。

『パンセ』の内にもこの種のノートは少なくない。出典を記すテキストは枚挙不可能である。一例のみ挙げれば、断片803-971[968]には都合四回の文献指示が見られる： Bern. in Ult. sermo. In missus, Aug. 5. de Civit. 10, Matt. 24. 36, Aug. 20 de Civit. 29である<sup>23)</sup>。しかしここでは、メタテキストの外延にかゝる問題を提起する事柄のみを観察しよう。

XIV章《理性の服従と行使》には、次の断片がある：

《永続性》の見出しの中の二種類の人々を見よ (209-178)。

これはXXII章《永続性》に分類された《各宗教における二種類の人々》なる標題をもつテキスト (318-286) に送り返す。この事実は、当然二つの章の間のテーマ上の関連を明示する。しかし今考えるべきことは、参照指示を唯一の機能としてもつ完結した断片というものは、書き手が自己自身に宛てた純粋に私的な備忘録に他ならず、それ自体必然的に暫定的な性格をもつという点である。註釈はこうしてメモでもありうる。この文章の《Voyez》という命令法二人称によって、書き手は自分に指図しているのである。

だが、同じ法・人称を示す語形であっても、一定量の純然たるテキストに先導されている場合には、それが制作上の指針としての私的な覚書であると断定することは困難になるのではないか。例えば XVIII 章に置かれた断片：

肉的なユダヤ教徒および異教徒には悲惨がある。キリスト教徒も同様である。異教徒には贖主はいない。彼等はそれを望みさえしないのだから。ユダヤ教徒には贖主はいない。彼等は贖主を望むけれども無駄なのだ。キリスト教徒にしか贖主はいない。

《永続性》を見よ (255-222)

において、最後の《Voyez Perpétuité》は、本来的な参照指示の註釈、つまり読者へのそれであると思われる。ところが『パンセ』の煩わしさは、公にされた版がそのまゝ鵜呑できない点にある。というのもこの註は、『草稿』(p. 108)においては決してこの位置に置かれているのではない。ラフュマ (L. II, p. 44) によれば、それは断片紙片の裏面に記載されているのである<sup>24)</sup>。この事實は、本来の註釈と見えた参照指示を私的なものに変えてしまう危惧もある。もう一つ、恐らく私的でないと思われる註記を挙げれば、

... / 富める者はその財を捨て、子等はその父祖の心地よい家を出て人住まぬ地の厳しさを求める等々。ユダヤ人フィロン参照 / ... (370 [p. 188]-338)

があろう。もっとも、ここには書き手の誤解もあって (cf. S. p. 188, note 17) か、ポール・ロワイヤル版は段落全体を削除している。

では、これらと第一の例のいわば中間に位置する、写本にのみ残っている第 XXVII 章の一断片においてはどうか：

各宗教における二種類の人々

《永続性》を見よ (398-366)。

中間的および理由は、第一行目が備忘録の特徴である省略を示している事実である。この文をテキストと判断するか、それとも筆者にそう思われるように備忘録と看做すかに応じて、第二行目の《Voyez Perpétuité》なる註記も、読者への指示であるか、もしくは書き手の覚書であるかが決定されるであろう。

しかし、この識別方法は必ずしも常に有効ではない。多かれ少なかれ下書であるにせよ、純然たるテキストであることには変らない本文に続きながら、個人的なメモとしてしか取れない註釈があるのである。これまた二人称の命令形が書き手自身に呼びかける。《永続性》の章で最大のテキストの末尾を見よう：

...驚くべきことは、この宗教が暴君の意志に撓むことも屈することもなく持続してきたということである。というのは、国家ならば時にはその法律を必要性に応じて屈従させるようなことがあっても存続しておかしくない。けれどもモンテーニュの中の丸を見よ (313-281)。

最後の節は『草稿』(p. 125)では《mais que Voyez le Rond dans Montagne》となっ

ている。主節の《il n'est pas étrange que》の補足詞が反復されて、しかも来るべき節が書かれる代りに別の言語域に属する註記が闖入しているのである。《けれども》が実現しようとして実現しない形や意味を理解するためには、直前に位置する別の断片(312-280)の書き出しをみればよい。もっとも、この文法上の混線にもかかわらず、《mais que》に続く部分は二つの書記法上の工夫によって弁別されている。まずそれが大文字で始まっていることであり<sup>25)</sup>、他の一つは《Voyez》以下が上下を二本の横線によって囲まれているのである。アンジウはパスカルが《Etat subsiste lors que l'on fait》及び《Voyez le rond dans Montaigne》の二行に下線を施していると記している(T. A., I, p. 199)。しかしそれでは第一の下線が説明不可能となろう。それに上の線はアンダーラインにしては下の《Voyez…》の行に近すぎる。これは二本線による隔離とみるべきであろう。

ところで《モンテーニュの中の丸を見よ》とはどういうことか。アヴェはこの《丸》というのは、パスカルが蔵書の『エッセ』に付けていた目印であると説明しているという<sup>26)</sup>。現在のところ、真実らしい仮説は他に提出されてはいない。アヴェの解説が正しければ、この丸は書き手以外には伺い知ることはできない筈である<sup>27)</sup>。ということは、それを《見よ》との指示が書き手以外の者に宛てられたものではないことを意味する。これは作業上の覚書であって、《見よ》はいわば内的対話における二人称である。

以上が『パンセ』中にみられる註釈という種類のメタテキストである。それは(理論的には)二つに分けられた。一は備忘録メタテキストで、そこでは書記行為は二つの基準のいずれにも適う。他は、特定の文についてそれと認定することは困難だが、端的ないみでの註釈で、そこでは主題の再帰性は認められるが、宛人はもはや書き手ではないという点でテキストに接近している。これはメタテキストであるが本質的には書き手の私的な備忘録ではない。

### 3. 《Transition》

次に、狭義の修辞学つまり作文法の伝統が《Transition》(移行・繋ぎ)と呼んだものを取り上げよう。『ロベール仏語辞典』はこれを「ある観念の表現から別の観念へと移行したり、議論の諸部分を結合する仕方」と定義している。19世紀の修辞学の教科書の一つ、ペリッシエの『フランス修辞学原論<sup>28)</sup>』から、もっと詳細な説明を読もう：

Transition とは、二つの観念、二つのイマージュ、または二つの推論の間にたてられた関

連である。これは、精神が一つの主題から別の主題へと移動するのを助けるところのいくつかの語か一つの文章全体によって示される (...).

あらゆる transition の根本は、次の無邪気な文章によって表されよう：「私はそれについて話した。今やこれについて話そう」。しかし作家はこの白状の赤裸々さと素気なさを巧妙にぼかさそうとする。それ故に、言われかつ展開されたばかりのことを要約し、今から言われ展開されることを示す一つの命題——その一部は過去を思い出させ他の一部は未来を予告する——を見出すことが必要なのである (p.263-264).

リセの哲学教師時代にジャン・ギトンが勧めていた作文法におけるパラグラフの理論も同じ伝統に立脚している。ギトンは書いている：

私は生徒達に、あらゆる表現技術の秘訣は同じことを三回言うことにあると教えていた。それを予告し展開する。最後にそれを一気に要約する。それから別の観念に移る。こうして私の生徒達はかつて、次の教訓を歌にしていた。

今からそれを言おうと言う。

それを言う。

それを言ったと言う<sup>29)</sup>。

予告、要約、移行、これが《transition》の役目である。一般にテキストがある事柄（主題）について何らかの意味（情報）を与えるのに対して、如何なる特定の情報も与えず、むしろある情報と別の情報との結節をはかる手続、あるいは複数情報間の移行に関する情報（méta-information）、これが修辞学のいうトランジションである。

作文の心得にすぎないこの手続は、実際には創造的なあらゆる知的活動は勿論、歴史の動きにおける《transition, 縫合部, 移行, これがこれであることを止めそれとなる瞬間》、《起源あるいは変貌の時期》という高度に一般的な問題と類比を持っている<sup>30)</sup>。ちなみに『パンセ』においてはこの語は XVI 章の標題に《人間の認識から神への移行 (transition)》という、弁証論におけるまさに最重要の結節点を示す形で一回だけ出現している。また『詩篇』140,10 の《Singularis sum ego donec transeam》に、パスカルはイエスの生から死への《過ぎ行き》という神秘的な (anagogique) 意味、ダンテのいわゆる《超意味》(sur-sens)<sup>31)</sup> を読み込んでいることをつけ加えよう (fr.650-801)。

説話の領域において一部の批評家を触発してきた移行の手続は<sup>32)</sup>、談話体においても検討されて然るべきであろう。筆者がここで試みるのは、そのテキストとしての身分を明らかにすることのみである。

『パンセ』にはこの種のテキストの例はこと欠かない：

以上が大体において、我々を避け得ない誤謬に導くためにわざと与えられているかと思える欺く力の効果である。我々を欺くもっと別の原理もある (...) (78 [p.54]-44).

これは先に (§ 3, 1) 余白の書き込みを引用した《想像力》なるタイトルを有する断章の一部である。書き手はここで、今まで述べてきたことを「一気に要約し」、今から別の原理（古い印象、新しいものの魅力、病気、利害）について語ろうとする。これは言説の「過去を思い出させ」、「未来を予告する」論旨の繋ぎ目であって、他の何らかの意味を提供するわけではない。予告も大まかである。大同小異のことが、別の長い断章《人間の不均衡》の含む幾つもの《移行》について言える。即ち、

以上が我々の真の状態である。これが我々をして確実に知ることも絶対的に知らないこともできなくするものなのである (230 [p.130]-199).

そのことがよく理解されるなら、誰でも自然によって置かれた状態に安んじて留まるであろうと私は思う (*Ibid.*, p.131).

我々の弱さの証明を完成するために、最後に私は以下の二つの考察をもって終ることにしよう (*Ibid.*, p.134).

前二者は簡単に要約したあとその帰結への発展を告げる。第三の例文は過去を思い出させたあと、最後に来るべき考察を予告する。だがその考察は現れず、テキストは未完のまま終了する。

このような分節の手法とメタテキストとの関係は如何なるものか。既に後者の例として挙げた文 (§ 1 参照) を思い出さねばならない。即ち、

Après avoir montré la bassesse et la grandeur de l'homme (151),

Après avoir expliqué l'incompréhensibilité (182).

これらはいずれも「言われ展開された」と想定されることを要約している。テキスト本体を構成する言説はその後に位置することになる。これらの覚書テキストは従って同時に《transition》であったことがわかる。

以上見た例は全て、情報についての重複した情報である限りにおいてメタテキストである。弁別特徴の第一は完全に満たしている。第二の基準がここで、註釈の場合と同じように再び識別をもたらす。というのは、最後の二例は同時に備忘録であって、その宛人は書き手自身なのであるが、それ以外の例文は（まだ多少とも下書であるにせよ）、もはや私的なメモではなく、その言説は既に読者を指向していると判断されるからである。実際、《移行》は読者の読む行為の導きを機能とする言説として、《完成された》作品においても残るべきものである。《完成》はここで実践的で全く日常的な意味しかもたないことをことわる必要があるのか。絶対的に語るなら、いわゆる《決定版》(*ne varietur*) とて《*varietur*》にすぎない。「他人には決定的なものとして現れるとしても」とサルトルは言う、「創造された物品は我々には常に執行猶予の状態にあるとみえる。我々にはいつでも

この線、この色、この語を変更することができる<sup>33)</sup>。その意味では、《下書き》ならざるテキストは決して存在することはないとすら言える<sup>34)</sup>。そして『パンセ』においては、完成なる語は遙かに相対的な意味でしか使えないことは言うまでもない。《決定稿》とはしばしば下書きであり、下書きしか残っていなければそれがまた読者にとっては《ne varietur》なのである。

結論しよう。《繋ぎ》は作品の言説を指示対象とする限りにおいてメタテキストの一種である。けれどもこれは、書き手と読者の同一／相違の基準によって二分される。書き手とは異なる読み手に宛てられた本来的な繋ぎと、未だ書記行為の《記憶助け》(aide-mémoire)として書き手自身に回帰する繋ぎとにである。《transition》とは、読者の読みを確実なものとするための冗長的テキスト（これは一つのサービスである）であり、メタテキストをテキストのように見せる技巧である（これは一つの罫かもしれない）。或いはそれはテキストに変装したメタテキストである。そして『パンセ』には、未だ備忘録でありながら、既に（しかし未だ暫定的な性格を免れ得ない）《transition》でもあるメタテキストが存在する。

メタテキストの輪郭を描くために、以上の備忘録・註釈・《繋ぎ》に続いて、最後に、既に幾つか例をみた標題について考察しよう。

（続く）

## 註 釈

### 1. 本研究の構成は次の通り：

序

#### 第一章 メタテキストとは何か

§1 テキスト／メタテキスト

§2 メタテキストの弁別特徴

§3 メタテキストの外延

§4 《秩序》

#### 第二章 言語にとって私性とは何か

§5 作者の意図／実現としての作品

§6 メタテキストの言語学的特徴

結

ここに収録できるのは §3 の途中までである。

2. 『パンセ』からの引用はことわらない限り第二写本に従うセリエ版 (*Pensées*, éd. Ph. Sellier, Mercure de France, 1976. S版と略記) によるが、断片番号はS版、および第一写本に従うラフュマ版 (*Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets*, éd. L. Lafuma, 3 vols, Ed. du Luxembourg, 1952. 《三巻本》, L. I, L. II... と略記; *Pensées in Œuvres Complètes de Pascal*, éd. L. Lafuma, Seuil, 1963. 《全集版》, L. O. C. と略記) の二重併記を用いる。S-Lの順である。更に、1° 1658年の分類による断片束 (liasses) の番号はS版のそれを用いる。2° Lが二つの本で断片番号を異にしている場合には、三巻本の番号に続けて〔 〕内に全集版のそれを示す。3° 上記以外で註釈や異本の理由で使用する版は以下の通り：

— *Le Manuscrit des Pensées de Pascal*, éd. L. Lafuma, Les Librairies associées, 1962 (*Le Manuscrit* または『草稿』と略記)。

— *Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets*, le fac-similé des éd de Port-Royal de 1670 et 1678, Univ. de la région Rhône-Alpes, 1971 (《ポール・ロワイヤル版》, またはéd. de P.-R. と略記)。

— *Pensées*, éd. L. Brunschvicg, in *Pensées et Opuscules* Hachette, imp. 1968 (《ブランシュヴィック版》, またはB版と略記)。

— *Pensées de Pascal*, éd. Z. Tourneur et D. Anzieu, 2 vols, Ar. Colin, 1960 (T.-A.版と略記)。

— *Pensées*, éd. M. Le Guern, 2 vols, Coll. Folio, Gallimard, 1977 (G版と略記)。

— 前田陽一『パスカル『パンセ』注解』第一 (岩波書店, 1980)。

なお上記引用はL版による。

3. L. I, p. 79; G. 110参照。なおB. 423は《Contrariétés…l'homme》を斜字体にしている。
4. S. p. 83; T.-A. 117参照。後者は《Après…l'homme》を断片の標題としている。なおポール・ロワイヤル版 (XXIII-8) は《Contrariétés…l'homme》を削除している。
5. これらの束 (liasses) を《chapitre》(章) と呼ぶことについては断片 256-223, 78 (p. 55)-45を参照。他に《titre》(見出し) という表現も見える (cf. 209-178)。
6. Lは改行せずここまでを一行にしている。『草稿』では、これは二重の標題とテキスト (*Les grandeurs et ...*) の間の行間への追加と見える。細かい圧縮された字体である (p. 79; T.-A., I, p. 114)。なおル・ゲルン (G. 139) はこの断章の諸部分の配列について新しい解釈を提案している。
7. 断片97-63, T.-A. 63, I, p. 52, note 4参照。A. P. R. の解釈については後に触れる。
8. G. I, 《Notes》, p. 248. 引用中 (5~) は同書 p. 288 による補足。メナールはむしろ5月を主張している (J. Mesnard, *Pascal, l'homme et l'œuvre*, p. 129, Boivin, 1951; *Les Pensées de Pascal*, p. 41, C. D. U. et SEDES, 1976参照)。この講演については二つの資料がある：Filleau de la Chaise, *Discours sur les Pensées de M. Pascal...* (L. III 《Documents》, p. 91-92; *Œuvres Complètes de Pascal*, p. 1477, La Pléiade, Gallimard, 1954) 及びÉ. Périer, 《Préface》 de l'éd. de P.-R., *op. cit.*, p. 42 sq. (他にL. III, p. 134 sq.; L. O. C., p. 494 sq.; G. I, p. 49 sq.)。これらの証言の含む諸問題については、L. II 《Notes》, p. 32-33; G. Chinard, *En lisant Pascal*, chap. II, pp. 18-34 (Lille et Genève, 1948); A. Barnes et L. Lafuma, 《Le discours sur les Pensées de Filleau...》, I, II, in *Écrits sur Pascal*, pp. 81-115 (Éd. du Luxembourg, 1959) 参照。
9. G. I, 《Préface》, p. 11-12。
10. 《qui travailleront celui qui les recherche》(Sの解説) は斜字体の部分 (特に動詞の活用形) については判読困難である (『草稿』, p. 33. 諸版のテキスト及び前田陽一, 上掲書, pp. 10,



- 18-19参照)。またGは主節を《Et puis il faut chercher...》と読んでいる (G. 2)。
11. 断片644-780 et 781 : 704-467 (Sの句読法による) 参照。
  12. Cf. 《Les Pensées qui sont contenues dans ce Livre ayant esté écrites & composées par Monsieur Pascal en la maniere qu'on l'a rapporté dans la Préface, c'est à dire à mesure qu'elles luy venoient dans l'esprit, & sans aucune suite》(《Avertissement》de l'éd. de P.-R., *op. cit.*, p. 113 ; L. III, p. 163.
  13. Voltaire, *Lettres Philosophiques* (1733), XXV 《Sur les *Pensées* de M. Pascal》. p. 104, in *Mélanges*, La Pléiade (Gallimard, 1961).
  14. É. Périer, 《Préface》de l'éd. de P.-R., p. 68 ; L. III, p. 139.
  15. *Ibid.*, p. 64-65 ; L. III, p. 138-139. Cf. J. Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, *op. cit.*, p. 20.
  16. P. Nicole, 《Lettre à M. Le Marquis de Sévigné, in *Essais de Morale*, T. VIII (1688), citée dans L. III, p. 198.
  17. P. Nicole, *Elogium Pascalii*, in *Ceuvres Compl. de Pascal*, éd. Mesnard, T. I. Desclée de Brouwer, 1964, p. 985. ニコル自身この書き方を見習ったという伝承もある。Voir *Ibid.*, p. 906.
  18. P.-R. 版は、《Il a quatre laquais》を書き手に代って推敲するに際して、面白いことに、この4語の文を中核とする、100語ばかりから成る架空の《パスカル氏のパンセ》を捏造している (XXIX. 41)。下書は他者にまで書く意欲を唆るのである。
  19. Voir *le Manuscrit*, p. 43 ; S. p. 55, note 27 ; B. 83 (p. 369).
  20. ルソーのあるテキストについてプレイヤッド版全集はそういう配慮をしている。Voir J.-J. Rousseau, *Le Persifleur*, in *Ceuvres Compl.* I, p. 1103-1112 (Gallimard, 1959).
  21. セリエの指摘 (p. 66) は興味深い、そのような事実はS版の独創性の一つである《Liasse-Table》という考え方に抵触しないのか。《より豊かな目次》(p. 31) に置かれた断片が更に別の章に分類されるべきだとしたら、その《目次》なるものの存在理由は怪しくならないか。
  22. 篠田一士他訳『ボルヘス、サンチェス、フェルロシオ、デュ・モーリア』、二十世紀世界文学全集34 (集英社, 昭和43年) 参照。
  23. Bern[ard] に続く《in》は抹消すべきであった書き手の誤記。省略の補完は S. p. 489-490を見よ。
  24. T.-A. 219, I, p. 167は「直前のテキストの裏面に」と註記している。これは誤りであろう。でなければ、この書込みを T.-A. が fr. 219の末尾に印刷する理由がない。
  25. 諸版も様々な方法で《mais que》とそれ以下を区別している：《mais que — Voyez...》(L), 《mais que.../Voyez...》(T.-A. 278 ; G. 264), 《Mais que VOYEZ...》(S).
  26. S. p. 170, note 5 ; cf. T.-A., *Ibid.* ; G. I, Notes, p. 316.
  27. XXIII章《モーゼの証明》の最初の断片 (322-290) には、頭に《Autre rond》(別の丸) なる書き入れがある。『草稿』, p. 127を見よ。但しこのテキストはニコルの手になるものという (T.-A. 287, I, p. 203)。S. L. B (626, 註) がこの書き入れを再生している。
  28. A. Pellissier, *Principes de rhétorique française* (Lib. Hachette et Cie, 1889, 11<sup>e</sup> éd.).
  29. J. Guittou, *Le travail intellectuel* (1951), chap. V. p. 216. Voir aussi p. 218, in *Ceuvres Compl.* III 《Sagesse》(Desclée de Brouwer, 1971). 安井源治訳『読書・思索・文章』, p. 116.
  30. J. Guittou, *op. cit.*, chap. III, p. 195-196.
  31. Dante Alighieri, *Convivio*, trad. fr. A. Pèzard, *Le Banquet*, II, I, 6, p. 314, in *Ceuvres Compl. de Dante*, La Pléiade (Gallimard, 1965).

32. Voir L. Spitzer, 《L'art de transition chez La Fontaine》(1959), trad. frans. É. Kaufholz, in *Études de style*, pp. 166-207 (Gallimard, 1970) et G. Genette, 《Discours du récit》, in *Figures* III, pp. 170-178 (Seuil, 1972).
33. J. -P. Sartre, *Qu'est-ce que la littérature?* II, p. 90 (Gallimard, 1948). 典型的な事例の一つはヴァレリの『我がファウスト』である。勿論ジュネット（上掲書）と共に『失われた時を求めて』も挙げることができる。
34. もっとも、虚構の人物は反対のことを断言している：  
Impossible, Monsieur ; mon sang se coagule  
En pensant qu'on y peut changer une virgule.  
(Éd. Rostand. *Cyrano de Bergerac* (1897), Acte II, sc. VI, p. 91, Éd. Fasquelle, 1930).